OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ネットワークにおける感情論理の分析
Author(s)	渡邊, 太
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2005, 31, p. 85-110
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5166
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ネットワークにおける感情論理の分析
－ソシオン理論のアプローチ－

渡　邊　　太

目　次

大阪大学大学院人間科学研究科紀要 31：85-110（2005）

ネットワークにおける感情論理の分析
―ソシオン理論のアプローチ―

渡邊　太

1. 問題の所在

人間は様々な感情を経験しながら生きている。喜び、怒り、哀しみ、楽しみといった基本的な感情だけでなく、愛情と憎悪の両価感情のように複雑な感情を抱くこともあるし、何となく調子がよいとか、すこし気が重いといった微弱な感情体験もある。何かを意識するときには、必ず感情が付着している。

感情は、他者との関係において自己の場に発生するものであり、本来的に社会性を帯びている。目的合理性を理論の基礎に置く社会理論では、感情をもつ存在としての人間を適切に捉えにくい。とりわけ、虐待、殺戮、粛清の恐怖政治、カルト教団のテロリズムなど一見すると非合理的と思えるわけのわからない現象は、目的合理性を所与とすると説明が困難である。

本稿の目的は、感情論理（affective logic）を社会分析の基礎に据え、素朴に考えると理解困難な現象を、可能な限り明証的に説明するモデルを構築することにある。感情論理とは、感情における論理の存在を指示するとともに、論理における感情の存在を指示する概念である。感情論理を分析するための方法論的戦略として、ソシオン理論のアプローチを採用する。

M. Weber の感情的行為の概念は、社会学における感情理解の 1 つの視座を示している。しかし、本稿で扱う感情は、狭義の感情的行為だけでなく、目的合理的行為・価値合理的行為・伝統的行為すべてに関与する行為の実践的駆動力としての感情である。

たとえば、目的合理的行為を貫徹する合理的経営において、貸借対照表に計上された利益は評価額を「上廻らなければならない」（Weber 1921＝1988: 74）。この「ねばならない」という感情はどこから来るのか。

ソシオン理論の 3 項関係モデルは、「ねばならない」という論理が発生するメカニズムを正負の荷重によって結合したネットワーク動作として説明する。

以下、前半ではソシオン理論の基本概念とネットワーク・モデルとしての特性を説明し、後半では事例分析としてオウム真理教事件についての説明を試みる。

2. ソシオン理論

2.1 荷　重

ソシオン（socion）とは、ネットワークに埋め込まれた社会的行為主体をあらわす概念である。木村洋二・藤澤等・雨宮俊彦の共同研究として始まったソシオン理論は、当初は、ニューラル・ネットワーク／ニューロンとの類比で、ソーシャル・ネットワーク／ソシオンの振る舞いを理論化することを目指していた（木村 2001, 2002; 藤澤 1997; 雨宮 2001）。その後、研究が進展するにつれて単なる類比を越えて、個々の個体に還元できないネットワーク・ダイナミックスを精密に記述・分析するモデルの構築を試みている。ソシオン理論は、とりわけ図解によって視覚的な理解を重視する点に特徴がある。複雑な社会状況は、文章で記述するよりも図で表記した方がわかりやすい。

ソシオン理論は、実践的駆動力としての感情をネットワーク・ダイナミックス的に捉える枠組として応用できる。ソシオン理論の諸概念のうち、本稿の目的において重要なのは、「サブスペース」（sub-space）、「荷重」（semio-weight）、「トリオン」（trion）の概念である。

ソシオンはネットワーク的に結合された他の個体とのコミュニケーションを通じて、主観的な世界像を構成する。構成された世界像は、ソシオンとしてのヒトが則自的に生きる場となる。この場をソシオンの「サブスペース」という。サブスペースのもとになる実体的存在の場を、「オブスペース」（ob-space）という。さらに、サブスペースの情報を並列的に扱うとき、次元が１つ上がって「メタスペース」（meta-space）が発生する。オブ／サブ／メタの各スペースは、簡単にいうと実践の場／予期の場／思考の場を指す。

感情論理が作用する場は、サブスペースである。サブスペースでは、表象の情報と情報の重み付けに関する情報が統合されて、リアリティの質感が構成される。情報の重み付け機能を担う予期のポテンシャル量を「荷重」という。

人間が経験するリアリティの強度は、荷重備給量の関数である。どれだけ情報の内包量が大きくても、荷重がゼロであれば経験的リアリティは無と同じである。リアリティの構成に関して、ソシオン理論では「リアリティ＝表象×荷重」として定式化する[1]。荷重は生きられた関係の記憶であるが、同時に未来に向けて先行的に投射される予期でもある。正負の予期の強度が高いほど、表象のリアリティは強烈に感じられる。

予期としての荷重は、正負（P/N＝positive/negative）の分極性をもつ。予期は、何かヨイコト／ワルイコト、という原初的感情としての報酬性／嫌悪性の情緒価を帯びている。信-不信、愛-憎、好-嫌といったより複雑な感情は、正負の荷重から分化すると考えられる。

荷重を投射しあうことで、サブスペースのソシオンは連結する。ネットワークの連結

強度は、他者の像のリアリティ強度である。リアリティ強度を備給する荷重は、他者とのコミュニケーションとネットワーク動作に応じて増減する。

2.2　トリオン

荷重の備給を調整するネットワークの演算装置が「トリオン」である。トリオンはサブスペースに埋め込まれた3項関係の演算ユニットで、情報入力に応じて予期を算出する。オブスペースに1つの3項関係があるとき、トリオンは行為主体ごとに機能するので、3つのトリオンが存在することになる。オブジェクティヴな3項関係は3つのトリオンの複合ネットワークとして把握できる。

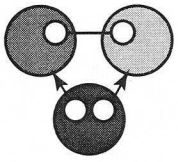
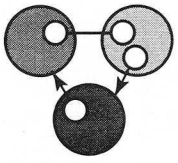
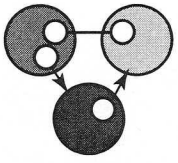
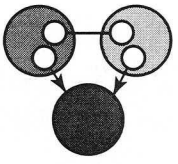
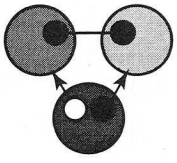
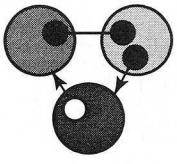
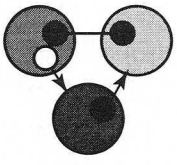
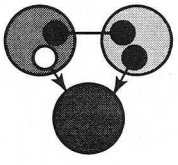
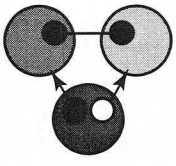
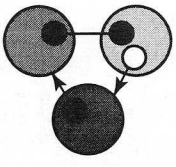
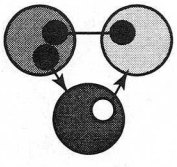
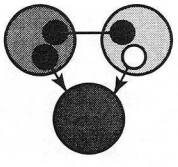
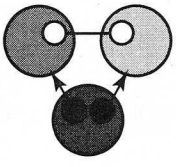
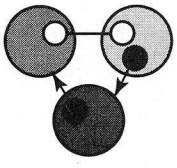
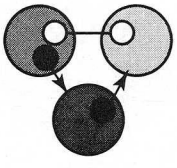
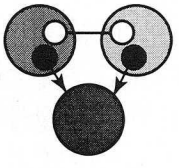
トリオンは、F. Heiderの均衡仮説を基準として荷重を算出する（Heider 1958＝1978）。均衡仮説によると、3項関係において3つのP結合か、2つのN結合と1つのP結合があるときに安定する。わかりやすくいうとPPP（友の友は友）、PNN（友の敵は敵）、NPN（敵の友は敵）、NNP（敵の敵は友）である。

3項関係の2辺を入力すると、残り1辺の符合は自動的に決まるという均衡仮説の特性は、荷重演算論理として応用できる。トリオンの荷重演算論理は、次のように定式化できる：P＊P→P、P＊N→N、N＊P→N、N＊N→P。

この荷重演算論理に基づいて、不安定トリオンは安定トリオンに移行する。安定トリオンでは正のフィードバックが作用して、荷重が高圧化する。「〜かも知れない」という当初の微小な予期は、「たぶん〜だろう」「きっと〜に違いない」「〜でなければならない！」とだんだん強化されていく。高圧化した荷重は、ネットワークの沸騰状態を引き起こす。「なければならない」という二重否定の語法は、しばしば殺戮や粛清といった極端な行為を帰結する。

トリオンの動作パタンは、荷重の正負と自他の2辺の向きを区別すると、基本16類型（4×4）を導くことができる（図2.2）。

基本16類型は、さらに順序と対辺の向きを区別すると、合計96パタン（4×4×3×2）になる（木村 2001）。サブスペースのネットワークでは、96パタンのトリオンが可能態として埋め込まれていて、コミュニケーションに応じてそのうちのどれかが現実態として起動する。正負のパタンが同じ複数のトリオンが起動すると、トリオン合成が起こり、ネットワークを環流する荷重量が増大する。正負のパタンが異なるトリオンが起動すると、精神分析的なアンビバレンツに陥る。

	s — s (A→B) – (A→C)	s — γ (A→B) – (C→A)	γ — s (B→A) – (A→C)	γ — γ (B→A) – (C→A)
PPP	 PsPPs 1	 PsPPs 2	 PsPPγ 3	 PγPPγ 4
PNN	 PsNNs 5	 PγNNs 6	 PsNNγ 7	 PγNNγ 8
NNP	 NsNPs 9	 NγNPs 10	 NsNPγ 11	 NγNPγ 12
NPN	 NsPNs 13	 NγPNs 14	 NsPNγ 15	 NγPNγ 16

○：正の荷重（P）
●：負の荷重（N）

（木村 2001をもとに作成）

三角形の下の頂点に位置する（＝A）を中心として、他の２項（左＝B、右＝C）に対する荷重関係の入力／出力（r/s）を区別する。対辺を固定すると、安定パタンの４種類とかけ合せて、合計16パタンが識別できる。

図2.2 トリオンの基本類型

3. 多元的現実のネットワーク

3.1　視点依存性

ソシオン理論は、図解の機能を積極的に活用する。同一の時間を生きていても、私とあなたでは異なるリアリティを経験している、ということがある。トリオンの吹き出しモデルは、現実の多元的構造を組み込んだネットワークを視覚的にわかりやすく表現したものである（図3.1）。

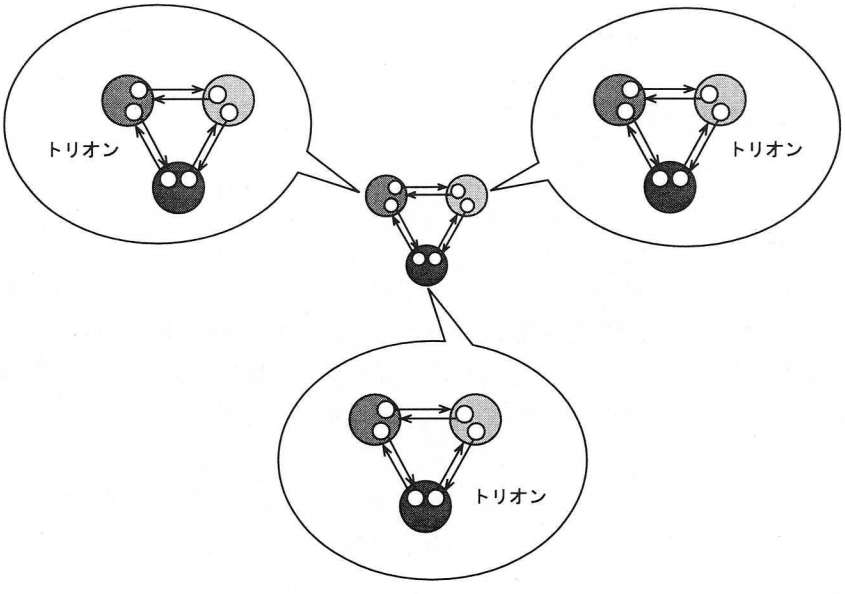


図3.1　トリオンの吹き出しモデル

吹き出し内部の3項ユニットがトリオンである。各トリオンが一致していれば、共同主観性が成立する。しかし、自他のサブスペース間がズレたまま相互作用が進展することもある。

従来のネットワーク分析においては、たいていの場合、サブスペースのネットワークとオブスペースのネットワークは区別されていない。関係の正負を焦点とする均衡仮説にもとづくネットワーク・モデルでは、ある関係を自他ともにP結合とみている（相思相愛である）のか、自分だけが一方的にP結合と思っているに過ぎない（片思いである）のかは、理論的に重要な差異となる。

Heider自身の議論においてもサブスペースとオブスペースの区別は曖昧である。そ

れはHeider理論をN人集団に拡張したD. Cartwright & F. Hararyの「構造定理」においても同様である（Cartwright & Harary 1956＝1970）。そして、往々にしてネットワークは誰にとっても同じ《現実》として共同主観化されていることが無条件に前提されていた。

実際には、自他のサブスペースが共同主観化されないこともある。構造定理はネットワーク全体の安定度を測定する基準だった。しかし、サブスペース内部での安定と、サブスペース間の共同主観的な安定は異なる次元に属する問題である。この点を明確に記述するための道具が、ソシオグラフの「吹き出し」である。

人は、自己の視点において世界を認識する。ネットワークは視点依存的に構成されている。このことが、社会現象の複雑なダイナミズムを生み出す1つの要因となる。サブスペース内部での視点依存的なネットワークにおいては、他者の予期さえもトリオンの荷重演算によって内的に構成される。厳密な意味での他者は、サブスペースの向こう側にいる。他者性の予期は、トリオン動作の効果として構築される。予期的に構成された現実を、人は生きる。

3.2 非対称性

トリオンの概念は、自他のダイアッドにも適用できる。G. H. Meadの自己論が明確に指摘するとおり、自己が自己を認識するとき、認識の能動的主体としての自己（I）と認識の受動的対象としての自己（me）に分裂する。人は、他者のまなざしを内面化して「me」を構成し、その「me」に対して主体的な「I」として反応する（Mead 1934＝1973）。

自己と他者のダイアッドは、「I」「me」からなる自己の2項と、他者「You」を結合したトリオンとして記述できる。Meadの概念を採用すると、「I」は常に能動であり、「me」は常に受動であるから、3項関係の矢印の向きを固定できる。ソシオンの自己は、「I」→「You」（他者像）、「You」→「me」（鏡像）、「I」→「me」（自己像）という3つの関係からなるシステムとして構成されている。

自己システムのトリオンの安定パタンは、(1) 正の対称型（PPP）、(2) 負の対称型（NNP）、(3) 服従型（PNN）、(4) 支配型（NPN）に分類できる（図3.2）。

互酬性が成り立つのは、(1)と(2)においてである。(3)と(4)は、自他の関係として非対称的であるにもかかわらず、トリオンとして安定している。服従型は、他者からNを与えられてPを返す。支配型は、他者からPを与えられてNを返す。支配と服従の非対称的な共依存的関係は、逸脱や病理ではなく、トリオンの可能なパタン動作として明証的に理解できる[2]。

不安定パタンは、安定パタンに移行する。自己の現象学的経験としてみると、トリオンの不安定パタンは、R. D. Laingのいう「存在論的不安定」（ontological insecurity）をあらわしている（Laing 1960＝1971）。存在論的不安定とは、自己が自己であること、

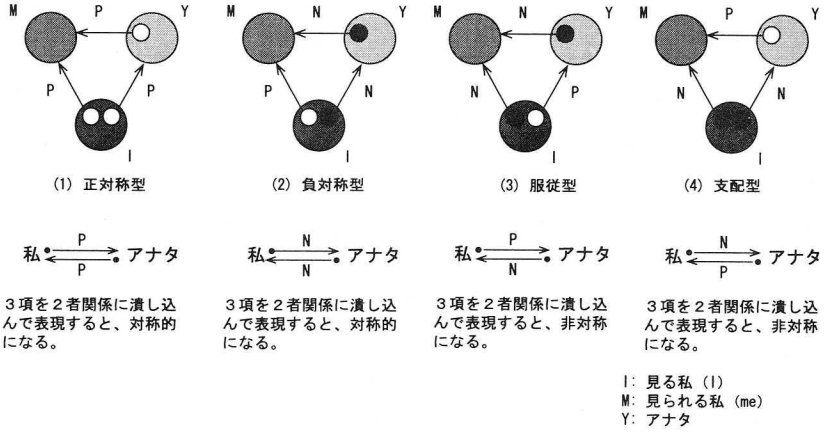


図3.2　自己システム

自分が生きているということを確信できない生のあり方を指す。

安定パタンは「存在論的安定」(ontological security) の感覚をもたらす。服従型や支配型という非対称的に安定するトリオンは、外在的な立場からは非対称的で歪んだ関係に思えるとしても、存在論的に安定しているので自他の関係が固着する。

他者からのNに対してPを返報する服従型は、自由主義的なヒューマニズムの人間像と非適合的であるかも知れない。しかし、S. Freud があきらかにしたように、人間は社会化の初期段階において自己を禁圧し他者に同調するという過程を必ず辿る (Freud 1923＝1970)。 Freud の第2局所論は、服従型の自己トリオンに対応する。他者を「超自我」、「I」を「自我」、「me」を「エス」に対応させると、欲望を断念して超自我を内面化する自己の社会化過程をトリオン動作として記述できる。

3.3　信頼と不信

ネットワークのパタンによって予期を算出するトリオンの概念は、信頼研究に有効な理論枠組を提示する。信頼は、民主主義的な社会制度の基盤となる社会資本としての意味をもつ。信頼が生まれる仕組みを解明することは、社会学、経済学、政策科学諸分野において重要な課題となっている。この課題について、行為者の目的合理性を仮定する合理的選択理論は1つの明快な解答を提示する。

信頼には、不確実な状況で遂行される賭けとしての性質がある。J. S. Coleman は、効用最大化原理にもとづいて、信頼が報われる蓋然性 (probability) の比率と潜在的得失の比率の比較考量によって信-不信の決定を下す合理的行為者モデルを提起している (Coleman 1990)。

しかし、賭けとしての信頼においては、合理的行為者にとって蓋然性は不透明である。相手がどれだけ信頼に値するかという蓋然性の評定は、それ自体が相手に対して自己が抱く信頼を意味している。したがって、蓋然性を判断する水準で作用する信-不信のメカニズムを解明する必要がある[3]。

信頼の合理的考量モデルは、B. Pascal の信仰の賭けの議論に端緒を見出すことができる。もっとも、賭けに関して Pascal は合理的考量を指示しているが、そのすぐ後で、Pascal は、「聖水を受け、ミサを唱えてもらうなどのことをするのだ。そうすれば、君はおのずから信じるようにされるし、愚かにされるだろう」(Pascal [1670]1844＝1973: 161-162) という。賭けの合理的考量による意志的決断によって、信頼しようという決意を抱くことはできる。しかし、そのことは必ずしも実際の信頼を帰結するわけではない。だからこそ、Pascal は実践的助言として、教会に通って仲間とともに祈ることを勧めるのである。

不確実な状況で、信-不信のどちらかに賭けることは、合理的考量を越えた飛躍が必要になる。Pascal の助言は、他者との関係のなかで信頼が形成されることを示唆している。信-不信の発生は、ネットワーク動作によって説明できる。

教会に通うことが信仰を確立する上で実践的有効性を発揮するのは、他者の信仰が自己の神への信仰を媒介するからである。PPP の荷重演算は、他者の P を媒介とした P 荷重の発生を説明する。

さらに、N を含む安定パタンもあるので、信頼できる他者の N を媒介とした P 荷重 (PNN)、信頼できない他者の P を媒介とした N 荷重 (NPN)、信頼できない他者の N を媒介とした P 荷重 (NNP) というトリオン動作も作動する。

信-不信の生成で重要なトリオン動作として、媒介された信-不信だけではなく、他者と他者の関係に信-不信を投射する荷重演算がある。一方の他者に P 荷重を賦与し、他方の他者にも P 荷重を賦与するならば、両者の間には P 結合が予期として投射される。トリオン動作によって、人は他者と他者の関係に勝手に予期を投射するのである。

サブスペースに埋め込まれた他者と他者の関係を「ソシオ・ブリッジ」(socio-bridge) という。3 項関係の対辺に当たるソシオ・ブリッジは、自己の内部に構成されたものであるが、外部の他者性としての現象学的リアリティを有する。ソシオ・ブリッジは、自己が直接関与できない関係であるから、しばしば精神分析的な「否認」をネットワーク的に構成する。

J. M. Keynes の「美人投票」や R. K. Merton の自己成就的予言の議論をはじめとして、社会現象では他者と他者の関係をどのように読み取るかが決定的な重要性をもつことがある (Keynes 1936＝1995; Merton 1949＝1961)。したがって、自己がどのような他者を信頼 (または不信) するか、ということだけではなく、他者と他者の関係についての信-不信がどのように構成されているか、ということも信頼の社会学的研究において重要な論点となる。

他者と他者の関係の解読は、合理的考量の前提となるものであり、合理的考量のメカニズムによってではなく、予期の発生原理から説明しなければならない。ソシオン理論のトリオン概念は、予期のネットワーク的構成を説明する1つの理論モデルを提示する。

以下、ソシオン理論のトリオン概念を事例分析に応用する。ネットワーク分析の枠組に負の関係を組み込んだソシオン理論の枠組は、テロリズムやマインド・コントロールといった一見すると非合理的に思える現象を合理的明証的に説明できる利点がある。

4. オウム真理教の事例

4.1 オウム真理教事件

ここでは、一連のオウム真理教事件についてソシオン理論の視点から分析する[4]。1995年の地下鉄サリン事件は、宗教団体による未曾有のテロリズムだった。なぜ、人々の救済を願うはずの信仰者が地下鉄にサリンを撒くという犯罪行為に従事することになったのか。こうした行為は、洗脳やマインド・コントロールの結果として説明されることがある（西田 1995; 浅見 1997）。だが、洗脳やマインド・コントロールという概念は、人間行動を客観的に記述するものではなく特定の価値判断にもとづく視点から記述するものであり、信者の置かれた社会的文脈を適切に位置付けない点で科学的妥当性に関して問題があると指摘されている（櫻井 1996; Anthony 1999）。また、A. Shupe & D. Bromley によると、マインド・コントロール概念は反カルト運動において象徴的文脈で使用されたものであり、運動の実践的関心と合致していた（Shupe & Bromley 1994: 10-11）。

犯罪に関与した信者の行動は、一見すると非合理的で理解できないように思える。だが、洗脳やマインド・コントロールという言葉を当てはめるだけでは、一連の事件に関与した信者の行動を十分に説明したことにはならない。信仰が極端な行為に至る意味連関を明証的に解明する必要がある。ソシオン理論のアプローチは、テロリズムへの関与を単に常軌を逸した行動とみるのではなく、一定の感情論理にもとづく（ある意味ロジカルな）判断の結果として説明することを試みる。

オウム真理教は、ヨーガ道場から出発した仏教系の新宗教である。教祖麻原彰晃の「空中浮揚」写真が雑誌『トワイライトゾーン』に掲載されたのは、1985年のことだった。1987年に教団名を「オウム神仙の会」から「オウム真理教」に改称し、1988年には富士山総本部道場を開く。出家信者は、「忍辱精進極限修行」と呼ばれる修行システムのもとで、クンダリニー・ヨーガ成就をめざして修行に励んだ。

教団が成長してくると、教団への反対運動も起こってくる。1989年に、東京都知事に「宗教法人規則認証許可書」を提出するが、信者の親たちによる反対運動を理由として受理を保留される。宗教法人として許可されたのは翌年のことである。また、1990年に教団は熊本県波野村に道場建設のための土地を取得するが、地域住民の間に反対運

動が起こっている。同年、教祖をはじめとする信者が総選挙に出馬したが、全員落選している。

一連の事件に関する裁判によると、1980年代後半から教祖と教団幹部信者らが犯罪行為を重ねていったことが明らかになりつつある。修行中の信徒の事故死を違法に処理した事件（1988年）、脱会を希望した信者の殺害（1989年）、教団に反対していた弁護士一家の殺害（1989年）、亀戸道場と皇居周辺でのボツリヌス菌噴霧（1993年）、創価学会名誉会長を狙ったサリン噴霧（1993年）、元信者の殺害（1994年）、松本サリン事件（1994年）、スパイ疑惑による信者殺害（1994年）、お布施返還訴訟を起こした元信者の知人の殺害未遂（1994年）、被害者の会会長の殺害未遂、公安警察のスパイと誤認した男性の殺害（1994年）、信者の兄の殺害（1995年）など、犯罪行為を重ねる。そして、1995年に地下鉄サリン事件が起こった。死者12人を含む5000人以上の被害者を出す大惨事となった。

4.2 帰依の構造

一連のオウム真理教事件に関して、グル（宗教的指導者）に宗教的に帰依することと、犯罪行為の指示に従うことの間には、何らかの行為連関を見出すことができるだろうか。マインド・コントロール理論は、こうした問いを無効化するほどに直接的な回答を提示する。マインド・コントロール理論によると、反社会的な性格をもつカルトは、宗教的な装いのもとで、人間の自由で自律的な選択能力を剥奪するような人格改造技術を利用している（Hassan 1988＝1993; 西田 1995; 浅見 1997）。S. Hassanは、「マインド・コントロールの本質は、依存心と集団への順応を助長し、自律と個性を失わせることである」（Hassan 1988＝1993: 106）という。マインド・コントロールによって自律的な選択能力を喪失し、反社会的な指示にも躊躇せず服従する人格が植え付けられる。

心理学的なマインド・コントロール理論は、一般に外部からの情報遮断によって信仰が強化されるメカニズムを想定する（Hassan 1988＝1993; 西田 1995）。批判的情報を遮断し、組織に有利な情報だけを摂取させることで、他者のマインド・コントロールが可能になる[5]。Hassanによると、「人々が破壊的カルトの罠に陥るのは、批判的情報にふれさせてもらえないだけでなく、適切に働いて情報を処理するための内面的機構が（マインド・コントロールの結果）欠けてしまうためである」（Hassan 1988＝1993: 125）。

オウム真理教の信者においても、教団や教祖に対する批判的情報が遮断されていたために、信者たちはグルへの絶対帰依に縛り付けられていたのだろうか。ところが、信者たちの証言を詳細に検討してみると、必ずしもそうでなかったことがわかる。信者たちは、批判的情報を十分に摂取していたにもかかわらず、その上で、グルに帰依していたと考えられる。

一例をあげると、1989年に『サンデー毎日』がオウム真理教に対する批判キャンペー

ンを展開している。このような教団に対する外部からの批判的な情報は、教団の内部で信者に対して隠されていたわけではなかった。むしろ、その記事が信者の間でまわし読みされていたことが報告されている（佐木 2002: 125）。マスメディアの情報に関して、早坂武禮は、「世間には、オウムの人間はテレビも新聞も見ることを禁止されていて、事件のこともまったく知らされていないというように伝わっているようである。それも一面の事実かもしれないが、人によってはこの種の情報に触れるのが仕事だったり、奉仕活動で外出した際に好んで情報を入れたり、報道に触れた者から発信される噂話の形で、その気になれば誰でも簡単にオウムを巡る大騒動の情報に触れることができたのもまた現実の姿である」（早坂 1998: 29）という。

なぜ、批判キャンペーンは信者を社会に呼び戻すことにならなかったのか。むしろ、その後の教団の動きをみると、外部からの批判はかえって信者の帰依を強める結果となったように思える。ソシオン理論では、このようなメカニズムをネットワーク反対効果（network opposite effect）として分析する。グルへの帰依が固定すると、グルに対する批判はグルへの批判につながらず、むしろグルを批判するマスメディアの方が間違っているのだ、という認識を生み出す（図4.2）。

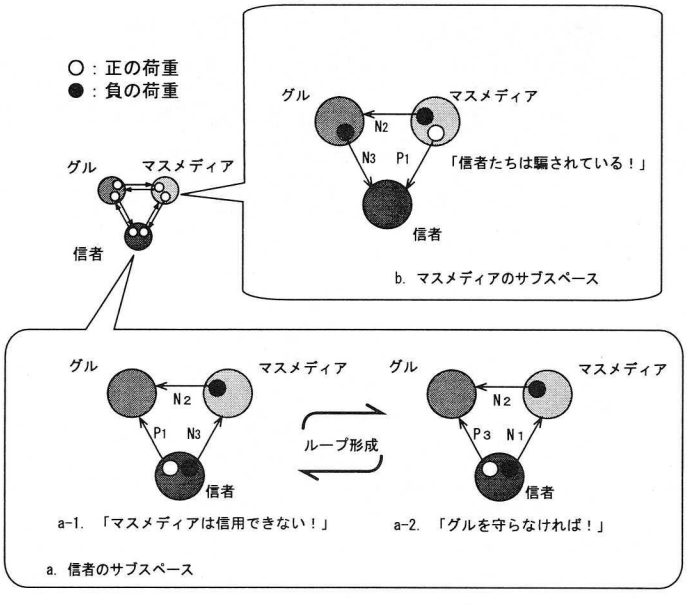


図4.2　マスメディアのネットワーク反対効果

信者のトリオンにおいて、グルへのP荷重（P_1）とグルとマスコミの間のN荷重（N_1）が入力されると、P＊N→Nの荷重演算によって、マスメディアに対するN荷重

(N_3) が出力される。これは、N2 つと P1 つというトリオンの安定パタンに合致するので、信者にとっては確かな現実と感じられる（図 4.2a-1）。

安定トリオンの回路では、正のフィードバックによって荷重が増幅される（木村 2001）。3 項を連結する 3 つの関係のうち、どこか 1 辺での荷重入力はトリオンの演算によって他の 2 辺における荷重の増幅出力を帰結する。信者のサブスペースにおいて、信者がマスメディアに対する不信を抱いていて N 荷重（N_1）を備給しているとき、マスメディアがグルを批判して N 荷重（N_2）を送るとどうなるか。N＊N→P の荷重演算によって、信者はグルに対する P 荷重（P_3）を投射する（図 4.2a-2）。

トリオンの安定パタンは、向きと順序の組み合わせに関する全パタンにおいて荷重を増幅する潜在性をもつ。図 4.2 の a-1 と a-2 は、パタン間でループを形成し、ロックした関係パタンを増幅的に強化する。3 辺の荷重が左回りに入力されても右回りに入力されても、いずれも全体として安定パタンを強める働きをする。

「グルは正しい」（a-1 の P_1、a-2 の P_3）という感情と、「マスメディアは信用できない」（a-1 の N_3、a-2 の N_1）という感情は、トリオンの安定パタンとして連結されることで相互増幅的になる。グルへの信頼とマスメディアへの不信をそれぞれ 2 項の関係としてみると、信者とグルの P 関係と信者とマスメディアの N 関係は、相互に独立の関係となるはずである。しかしトリオンの仮説によると、則自的には人間の認識は（ほとんど無意識のうちに自動的に）3 項連結される。マスメディアとグルの N 関係を媒介として、信者・グル・マスメディアの 3 項は、閉じた三角形を構成する。信者とグルの P 関係、信者とマスメディアの N 関係は、3 項として連結されているのである。こうして、「グルは正しい」という感情と「マスメディアは信用できない」という感情が 3 項連結し、一方における感情の高まりは、トリオン変換を経て他方における感情の高まりを帰結する。トリオンのパタンがループ形成することで、いよいよ関係の強度は強まっていく。

一方、マスメディアは、怪しいグルに騙されている信者を助けたい、という人道的な見地に立つ。マスメディアがグルを批判するのは、搾取されている信者を救うためであった。マスメディアのサブスペースでは、真面目で無垢な（はずの）信者に対しては P 荷重（P_1）、怪しいグルに対しては N 荷重（N_2）が備給されている。一方への P と他方への N が固定すると、P＊N→N の荷重演算によって、信者とグルの間は N に違いない、という予期（N_3）が生まれる（図 4.2b）。これが、洗脳やマインド・コントロールという考え方の感情論理的基盤となる（渡邊 2002b）。

この形式で、それぞれのサブスペースが共同主観的にすれ違ったまま、ネットワーク動作が進行すると、マスメディアは信者を救うためにグルを批判しているにもかかわらず、マスメディアがグルを批判すればするほど、信者はグルへの帰依を強めることになる。このように、よかれと思ってしたことが、反対の効果をもたらすことをネットワーク反対効果という（Watanabe 2004）。

批判的な情報を入力すればするほど、帰依が強まっていく。この場合、単に批判的な情報を知らずに信じているのではないから、帰依する信者は自覚的な選択のもとで教団に参与していることになる。そうした批判も全部わかった上でやっている、ということが自分自身の決断についての確信を強めることにもなる。

このような社会心理機制の説明は、実際のオウム信者の証言と適合的である。たとえば、元信者の高橋英利は次のように述べている。「そういうふうに社会がオウムを敵視している頃に、僕はオウムの中に輝きをみたんですよ。91年11月に僕は入信したのですが、そのときに僕は、尊師が説かれている法則を聞いて、何故このようなことを説いている人たちが社会からボロクソに言われているんだろうと、不思議でならなかった」(河合・高橋・中沢 1995: 21)。高橋にとって、批判的情報はグルへの信頼を損なうものではなく、むしろ批判する社会の側の信用失墜につながるものだった。

また、教団に対する批判的な記事を目にしたとき、林郁夫は、次のように思ったという。「釈迦の根本仏教を世に広めようとしている教団が、どうしてそんな事件と結びつけられなければならないのか、この事件を含めて一連のオウム・バッシングは、裏で誰かがマスコミを操作しているのではないかと思いました。オウムを擁護する出版物を、患者さんや友人に郵送し、信じていた麻原やオウムの立場を守ろうと真剣に努力しました」(林 1998: 97)。教団に対する批判的情報は、むしろ教団を守らなければならない、グルを守るために闘わなければならない、という気持ちを鼓舞することになったのである。

ネットワーク反対効果においては、信者のサブスペースも、マスメディアのサブスペースも、ともにトリオンの安定状態に達している[6]。それゆえ、いずれの側でも自分の認識が正しいに違いない、という予期が発生する。ソシオン理論の仮説によると、安定トリオンでは正のフィードバックが作動するので、ネットワーク反対効果のパタンが成立すると、コミュニケーションによって誤解は解けず、むしろ相互に認識がずれたまま関係の拘束がいっそう強まっていく。

信者がグルに帰依するのは、情報遮断によってマインド・コントロールされていたからだ、というマインド・コントロール理論の説明は、オウム真理教の事例には当てはまらなかった。外部からの情報が届いても、グルに対する幻想は崩れなかった。特定のネットワーク的条件が整ったとき、教団に対する外部からの批判的な情報は、むしろ信仰を強化するように働くのである。

1980年代末から1990年代前半にかけて、教団が成長するとともに外部からの批判も大きくなっていった。そうしたなかで、信者たちは外部からの批判によって信仰を喪失するというよりは、むしろ外部からの批判をエネルギーとして信仰を強化させることになったと考えられる。グルへの帰依は、宗教的信仰の効果であるとともに、マスメディアや外部の社会とのN結合によって駆動されたネットワーク動作によって強化されるものでもある。そして、教団の外部に対する不信が固着すると、グルの指示に対する外

部的な判定基準が意味をなさなくなる。

4.3 ポアの論理

ネットワーク反対効果として強化されたグルへの帰依が他者の殺害を可能にするのは、どのような機制によるのか。殺害を含む一連の犯罪行為は、「シークレット・ワーク」と呼ばれていた（林 1998）。「ワーク」は、修行以外の作業を指す言葉であるが、それ自体も修行としての意味を付与されている。したがって、殺害などの行為にも何らかの宗教的意味が付与されていたと考えることができる。

林郁夫は、地下鉄の車内でサリンの入った袋を落として傘の先で突き破るとき、次のように思ったという。「私はこの人を殺してしまうのだ、と思いました。私は麻原の顔を思い浮かべました。『ああ、申し訳ありません。真理を守るためなのです。戦争なのです。高い世界へポアされてください』と、心のなかで叫びました」（林 1998: 434）。これは、林がサリンによる殺害をポアとして理解していたことを示している[7]。

ポアの概念は、他者の殺害に救済の意味を付与するものとして使用されていた（島薗 1997; Lifton 1999＝2000; 島田 2001）。ポアは、もともとチベット仏教では意識を移し替える行為を意味する概念であった[8]。そこから転じて、オウム真理教では、これ以上生きていても悪業を為すばかりの人間の生命をいったん打ち切ってトランスフォームさせてあげて、よりよい転生に導く手段を指す言葉として用いられるようになる。

島田裕巳によると、オウムで最初に殺人を肯定するように解釈できる説法が行なわれたのは、1989 年 4 月 7 日のことである（島田 2001: 164）。殺人の肯定を示唆する教えは、ヴァジラヤーナ（金剛乗）と呼ばれていた（島薗 1997; 島田 2001）。悪業を為す人間の生命を断ってトランスフォームさせることがヴァジラヤーナの教えであるとされたのである[9]。

この意味でのポアの概念は、人を殺すことが、むしろ救いになるという逆説的な教えをあらわしている。ポアは、ふつうは受け入れるのが難しい観念である。そこに信憑構造が成立するためには、どのような感情論理が作動していたのか。

ポアの論理は、悪業・悪人・グルの 3 項関係から展開するネットワーク・ダイナミックスとして記述することができる。ポアを実践する修行者は、グルの立場に同一化する。ポアの実践においては、悪業を為す凡夫から悪業を分離し、独立の要素として対象化する。そして、グルが悪人を悪業から救い出すという行為が主題化される。すなわち、グル・悪人・悪業の 3 項関係がトリオン化されて、ネットワーク・ダイナミックスが始動する（図 4.3）。

現世において、悪人は悪業と分かちがたく結合している（P_1：悪人と悪業の P 結合）。グルは悪業を断とうとする（N_2：悪業とグルの N 結合）。グルは、悪人をも救おうとするから、悪人に対して P 荷重を投射する（N_3：グルと悪人の P 結合）。このトリオンは、P 2 つと N 1 つの不安定パタンである（図 4.3a）。

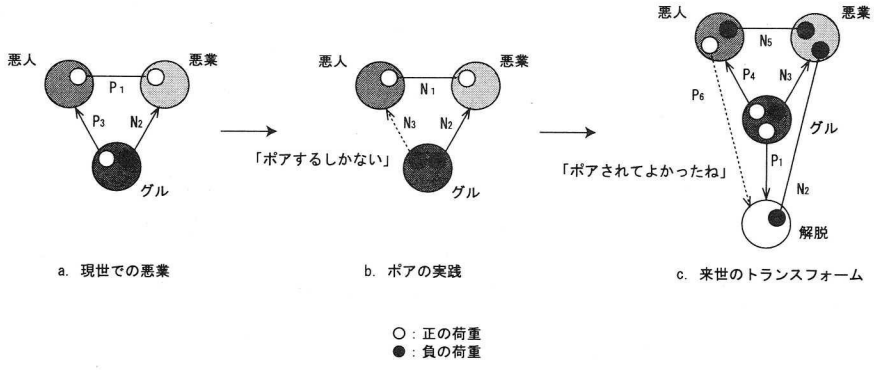


図4.3　ポアの論理

不安定トリオンは安定トリオンに移行する。悪人と悪業のP結合（P_1）が固定しているという条件を導入すると（つまり現世ではこの人はもう救われないと考えると）、トリオンを安定させるためにはグルが悪業を許容するか（グルと悪業のP結合）、悪人にN荷重を投射するか（グルと悪人のN結合）、どちらかを選択しなければならない。しかし、グルが悪業を許容することは教義上ありえない（N_2：グルと悪業のN結合）。したがって、グルが悪人にN荷重（N_3）を投射することになる（図4.3b）。すなわち、これ以上悪業を犯させないために、悪人をポアしなければならない、ということになる。

ポアは単なる殺人ではなく、現世で悪業と結合した魂を来世でより高いステージにトランスフォームさせる行為とされている。ポアの根拠は、グルの最終解脱にあるとされる。最終解脱者は間違いなくカルマを見切ることができる[10]。ここで第4項として導入された解脱という抽象的理念が介入することで、グル・悪人・悪業のトリオンはダイナミックなパタン変換を遂げる（図4.3c）。

グルは最終解脱している（P_1：グルと解脱のP結合）。悪業は解脱を妨げる（N_2：解脱と悪業のN結合）。グルは悪業を認めない（N_3：グルと悪業のN結合）。グルはポアすることで悪人を救う（P_4：グルと悪人のP結合）。ポアによって、悪人は悪業を断つことができる（N_5：悪人と悪業のN結合）。そうして、悪人はより高いステージに移行し解脱に接近する（P_6：悪人と解脱のP結合）。

よりよい転生を可能にするポアは、ポアされる本人にとっても望ましいと考えられた[11]。表面的に見ると、グルと悪人の間はN結合（殺害）だが、解脱という第4項を投入すると、むしろ（来世まで視野を広げてみれば）グルは悪人の魂を善に導いているというP結合（救済）を意味することになる。

現世では、悪人の魂と悪業が分かちがたく結合していたが、来世では魂は悪業から離れて、悪人と悪業のN結合、グルと悪人のP結合、そしてグルと悪業のN結合という新たなトリオンの安定パタンが出現する（もはや悪業と切り離されているのだから、こ

こでは元・悪人というべきか)。安定トリオンは荷重を増幅するので、N2つとP1つでロックしたポアのトリオンは荷重備給によるリアリティ感覚を生み出す。

このポアの論理は、検証不可能である。生き続けたとしても、その人がこの先悪業を積み重ねつづけるかどうかは誰にもわからない。しかし、ポアされてしまうと、「きっとこの先も悪業を重ねていたに違いない」という予期がトリオンの荷重演算によって発生する。ポアを実践することで、検証可能性は塞がれてしまう。

現世での検証不可能な論理が宇宙の深層構造においてリアルである、という感覚は、ヨーガによる神秘体験を土台としたオウムの宇宙構造観と適合的である。『マハーヤーナ・スートラ』によると、ふつう「現実」と考えられている「現象界」は粗雑な物質からなる虚像のようなもので、より深層には、微細な物質からなる「アストラル世界」、光と想念からなる「コーザル世界」という高次の世界が存在する(麻原 1988: 21-22)。この宇宙構造は「客観的」実在として想定されている(永沢 1995: 237)。ヨーガの神秘体験において出現するのは、これら高次の世界と考えられる[12]。

現実は虚像でヨーガによる神秘体験こそがリアルである、という世界観を受け入れると、現実に縛られた(煩悩に拘束された)自己の判断は不確実であり信を置くことができないということになる。そこで、グルへの帰依が重要な意味をもつことになる。何が正しいかを判断するのはグルであると考えられる。ある説法では、「この、何が真理で何が真理でないかを何度も何度も繰り返し、データを入れなければ、私達は過去世からの錯綜によって、ものを正確にとらえることができなくなっている。よって、ひたすら記憶修習をすべきなのである」(麻原 1991: 259)と述べられている。記憶修習とは、瞑想の内容となる詞章を十万回、百万回と反復して記憶することであり、深層意識のデータを入れ替えることを意味する(麻原 1991: 268)。

中沢新一は、ここにオウム特有の密教解釈があると指摘する。正しいデータは、グルのもとに貯蔵されている。グルの身体に集積された「叡知のデータ」をコピーしてもらうために、弟子は「できるだけ自分の心をまっさらにしておく必要がある」(中沢 1995: 269)。弟子に対するグルの行為は、つねに正しいデータを弟子に注入する意図をもつものとして理解される。

また、島田裕巳は、弟子にとっては、グルの指示がマハー・ムドラーとして認識されていたことを指摘する(島田 2001: 154)。オウムにおいて、マハー・ムドラーは、グルが弟子に与える試練という意味で受けとられていたという(早坂 1998: 358-359)。弟子は自身の煩悩を完全には認識できていないが、グルは弟子の煩悩を見極めることができる。したがって、弟子は自分の判断よりもグルの意思を優先することになる。島田は、「一般の組織においてなら、上からの理不尽な命令がくだされれば下の人間は反発する。ところが、オウムでは、マハー・ムドラーの仕掛けは、それを仕掛けられた人間にそもそも理不尽なものに映ると考えられている。逆に理不尽な命令であればあるほど、信者たちはそれをマハー・ムドラーとして考え、そこに修行としての意味を見出そうと

する」（島田 2001: 158）という。

グルの指示がマハー・ムドラーであれば、指示が理不尽なものであればあるほど、それは修行としての意義をもつものとして解釈される。救済のための殺害という逆説的な行為は、それが理不尽であるがゆえに、修行としての意味を付与された。深層のリアリティに関する信憑構造がトリオンの安定パタンとして構造化されている場合、マハー・ムドラーの論理も単なる理屈としてではなく現実的な意味連関として機能する。

ポアの論理は、殺害に救済の意味を付与する[13]。1990 年代前半から教団は化学兵器の開発や武装化を進めていった。反対運動が強まったことや、弁護士一家殺害に関する疑惑の高まりは、外部の社会を悪業と P 結合した穢れた世界であるという見方を強める方向に機能したと考えられる。教団にスパイが侵入している、という噂が教団内に蔓延したことは、教団において外部に対する敵意が浸透していたことを示唆している[14]。

4.4　現実化の機制

R. J. Lifton は、オウムにおいて、残虐行為が残虐行為を生むという「殺人の習慣」が機能していたことを指摘する（Lifton 1999: 216-217）。最初の偶然の死を覆い隠すための殺人を正当化するために、グルと弟子たちがさらなる多くの殺人を必要とした[15]。殺人を肯定する教えは、実際の殺人を心理的に正当化するものだった。そして、「グルは、死の所有権と呼ぶべきものを獲得した」（Lifton 1999＝2000: 217）。死の所有は、「利他的な殺人」を可能にするものであり、さらには「世界を殺そう」という意志に向かった（Lifton 1999＝2000: 219）。すなわち、世界の破壊がそのまま救済としての意味を付与されるのである。

ここで大事なのは、「殺人の習慣」や「世界を殺そう」ということが、単なる言葉の上のことではなく、現実として機能する機制を理解することである。任意の 3 項がトリオン結合し安定パタンにはまったとき、現実的な感覚をともなう意味連関として機能する。安定トリオンは、腑に落ちたという身体的な納得の感覚をつくり出す。3 項連結されたトリオンは、仮構された連関の現実的強度を増幅する意味生成の機能を担うのである[16]。

犯罪行為に荷担した実行犯たちは、マインド・コントロールによって思考停止していたというわけではなかった。思考停止していた部分もあるが、基本的には正常な判断力をもったまま悲惨な行動に走ってしまったと考えられる。サブスペースにおけるトリオンの荷重演算は、しばしば極端な行為にまで人を導くことがある。トリオンは、複数の項を特定のパタンで連結することで認識と思考を拘束する。トリオンの安定パタンに流し込むことで、一見すると荒唐無稽なロジックも現実感を帯びてしまう。正負の関係パタンが現実感をつくり出すと仮定するソシオン理論の枠組は、通常理解しがたいような意味連関を荷重演算論理によって説明することができる。

一連のオウム真理教事件については、「終わらない日常」における「さまよえる良心」

の問題を指摘した宮台（1995）、神秘体験によって即席に情報的化した身体を再び社会に根付かせることに失敗したと指摘する吉見（1995）、修行階梯制の分析からオウムを霊的ボルシェヴィキと位置付けた永沢（1995）、オウムをサイバネティックス的密教と捉える中沢（1995）、「第三者の審級」概念を軸として虚構が現実として機能する機制を分析する大澤（1996）、近世以来の日本の現世主義的宗教伝統の文脈にオウムを位置付けた島薗（1997）、オウムの暴力の核心に終末論的誇大妄想と究極的な絶滅兵器の相互作用があったことを指摘するLifton（1999＝2000）、日本社会からの疎外と終末論の結合が暴力を帰結したと指摘するReader（2000）、グルへの絶対帰依があたかも教義のように説かれたことを指摘する宮内（2000）、テロリズムに至る教団の軌跡を辿った上で「マハー・ムドラー」概念の重要性を指摘した島田（2001）など、様々な分析が提起されている。

ここで提示したソシオン理論による分析は、感情論理の視点から、信仰とテロリズムの意味連関の解明をめざした試みのひとつである。

註

1) 荷重概念は、脳内に神経科学的基盤をもつと考えられる（木村 1999）。正負の予期の先行投射は、時間とともに進展する環境に遅れをとることなく行為をくり出すために必要になる認識システムの機能要件である。荷重の神経科学的基盤については、Damasio（1994＝2000）、茂木（2001）、安永（1999）が参考になる。
2) 交換理論などでは、しばしば互酬性が前提とされる。たとえばP. M. Blauは、次のようにいう。「交換という考え方の根底にある基本原理はつぎのように簡潔に要約されうるであろう。すなわち、他者Bに報酬となるサービスを供与する個人Aは、その他者Bに義務を負わせる。この義務を果たすためにBはお返しとしてAに利益を提供しなければならない、ということである」（Blau 1964＝1974: 80）。ソシオン理論の自己システムで重要なのは、安定パタンには非対称的関係も含まれるという点である。AがBに一方的に贈与するが、BはAに何も返報しない、あるいは、AはBに花束を贈るが、BはAに対して肘鉄をお返しする、という関係も理論的に成立する。トリオンのパタンによって、互酬性は成り立つ場合もあるし、成り立たない場合もある。
3) 信頼の合理的モデルに対する批判は、基本的にこの論点に関する違和感にもとづくと考えられる。G. SimmelからN. Luhmannに至るまで、信頼を合理的考量に還元しないことは、社会学的信頼研究の伝統的なひとつの系列としてある（Simmel 1908＝1994; Luhmann 1973＝1990）。
4) 教団史および一連の事件に関する記述は、早坂（1998）、林（1998）、Lifton（1999＝2000）、Reader（2000）、島田（2001）、佐木（2002）、降幡（1998, 1998a, 1998b, 1998c, 1998d, 1998e, 1999, 2000a, 2000b, 2001, 2002a, 2002b, 2003a, 2003b, 2004）による。2004年2月27日、教祖麻原彰晃（松本智津夫被告）は一審で死刑判決を受けた。だが、弁護団は控訴手続きをとっている。一連の事件の全貌について、入手可能な資料が限られている上に、裁判の進行にも時間がかかっているので、完全に解明することは困難である。

事件の真相、信仰の内実について不可視の部分が大きい。ここで提示する説明モデルは、オウム真理教の事実そのものではなく、オウム真理教をめぐる言説を題材として、行為の意味連関を仮設的に再構成したものである。

5) S. Hassan は、マインド・コントロールの構成要素として、1）行動コントロール、2）思想コントロール、3）感情コントロール、4）情報コントロールの4つをあげている（Hassan 1988＝1993: 114）。いずれもマインド・コントロール技術として重要な手段とされている。Hassan は4つの構成要素を並列的にあげているが、情報コントロールは他の3つのコントロールを達成する前提条件であり、理論的にはより基底的な条件として捉えられる。

6) ネットワーク反対効果においては、すれ違う両者のサブスペースはいずれも安定状態に達する。ただし、異なるパタンで安定しているという点が理論的に重要である。信者はグルへの信頼とマスメディアへの不信において安定し、マスメディアはグルへの不信と信者への信頼において安定している。両者のサブスペースは、グルとマスメディアとのN結合以外はP/Nの布置が正反対の形になっている。唯一、共同主観的に一致するグルとマスメディアのN結合が蝶番となって、捻れた共同主観の状態でコンフリクトが高圧化する。ソシオン理論の「吹き出し」モデルは、G. Simmel（1908＝1994）、N. Elias（1970＝1994）、R. D. Laing（1967＝1973）らがそれぞれの研究で主題化した現実の視点依存性をネットワーク的にモデル化している点に特徴がある（渡邊 2002a）。

7) ただし、島田裕巳が指摘するように、すべての実行犯がサリンによる殺害をポアと捉えていたわけではない（島田 2001: 62）。したがって、ここでの説明は、殺害をポアと認識していた信者の行動に限定して適用しなければならない。

8) 中沢新一によると、チベット仏教におけるポワは意識を移し変えるという意味で、「法身のポワ」「報身のポワ」「凡夫のポワ」「死者のポワ」がある。（中沢 1985: 296-301）。このうち、ラマが死を控えた人の意識を純粋な浄土空間に抜き去る行為を意味する「死者のポワ」を歪めて解釈したものがオウムのポアの概念だったと考えられる。

9) 島薗進は、伝統的な密教思想およびヒンドゥー教のタントリズムの思想とオウムのヴァジラヤーナの教えを比較検討して、「麻原流のヴァジラヤーナの教えでは、解脱という目標への距離から見た差異が極端に強調され、人間同士の基礎的な相互性が軽んじられ、超人としてのグルの暴力が正当化されるに至った」（島薗 1997: 67）と指摘する。島薗は、伝統的なタントリズムにおいてはその危険性を制御する様々な装置が設定されていたが、オウムの場合はタントリズムの危険性を解き放った上に、現代的な技術主義と結合することで、暴力の噴出につながったとみている（島薗 1997: 99-100）。

10) 林郁夫は、創価学会名誉会長殺害未遂事件の際に、ポアという言葉を聞いて、次のように思ったという。「私は一瞬事態が飲みこめず、つまったような感じになりました。が、すぐに『ポア』というのが、どうやら『タントラ・ヴァジラヤーナ五仏の法則』の『ポア』、つまり悪業を犯している者をそのカルマを見切って殺してやり、より低い世界へ転生するのを不正でやるという『殺人』、それをしようとしたのだということがわかりました」（林 1998: 171）。島薗進は、オウムにおけるポアの論理について、「これは常人の倫理とは異なる『超人の倫理』があり、正しい意図をもつ『超人』には人を殺すことが許されるというのにほぼ等しい」（島薗 1997: 65）と指摘する。

11) 地下鉄でサリンを撒いた後、林郁夫は、「シヴァ大神、もろもろの真理勝者方にポアさ

れてよかったね」というマントラを千回唱えるよう指示されたと証言している（降幡 1998c: 227）。サリン事件の実行犯に与えられたマントラに関しては、1万回唱えるよう指示されたという証言もある（佐木 2002: 198）。

12) この解釈にしたがえば、ふつう我々が現実と思っている「現象界」は虚像のようなもので、真にリアルなのは高次の世界であるということになる。深層構造のリアリティは、ヨーガの神秘体験における身体感覚に支えられる。ある信者は、「中沢新一さんの本に書かれている神秘体験や、あるいは尊師自身が説かれておられる神秘体験が、修行を積んでいくと確実に追体験できるんです。瞑想していると光が見えてきたりとか。このまま修行を積んでいけば、私の先輩たちが味わった神秘をきっと味わうことができるだろう。そう信じているんです」（岩上 1995: 21）という。グルの指導どおりに修行すると、実際にリアルな神秘体験が起こる。こうして、神秘体験のリアリティがグルへの信頼の基盤となる。

13) 宮内勝典は、麻原が殺害を肯定するかのような内容の説法をヴァジラヤーナの教えとして説いたのは、すでに信徒殺害を犯している弟子たちを言いくるめ、納得させるための方策だったとみている（宮内 2000: 173）。

14) 1994年頃からスパイ対策が強化されるようになった教団内の雰囲気について、林郁夫は次のように報告している。「自分にはそのような質問はふさわしくないと文句をつける人はいても、スパイなんているか、バカげている、と文句をつける人はいませんでした。そのころまでにはすでに教団にスパイが潜入して、敵対工作をしているという認識が、サマナにかぎらず、オウム信徒にはあったということなのです」（林 1998: 226-227）。教団のなかで誰が「敵」なのかわからない、という不信と不安が渦巻いていたとみられる。

15) オウムにおいて連鎖的に犯罪が重ねられていった経緯について、島薗進は、「最初の暴力は偶発的だったが、その後の自覚的意図的暴力への発展は急速である。確信犯的暴力へと向かっていくこのたやすさ、手早さにこそ注目すべきだろう」（島薗 1997: 81）と指摘する。また、島田裕巳は、最初の信徒殺害があった後、宗教法人の認証をめぐって東京都と衝突したことがきっかけとなって、「ポアの対象となる悪業の範囲は、グルを裏切った人間からグルに敵対する人間にまで広がっていった」（島田 2001: 172）と指摘する。

16) 意味の働きが現実感を生成することについて、C. Levi-Strauss は次のように指摘する。「意味するものと意味されるものとのあいだには、神の理解力をもってしてのみ解消しうるような種類の不均衡があり、その結果、意味されるものに対して意味するものの過剰が存在し、この過剰は意味されるもの次第できまることになる。それゆえ、人間は、世界を理解するための努力のなかで、つねに余分の意味を処分している」（Levi-Strauss 1968＝1973: 41）。人類学におけるマナの概念は、余分の意味の補充的分量を表象する。ゼロ記号というべきこの補充的分量によって、意味は現実的な意味となる。荷重概念は、ゼロ記号の機能を情報理論的に精緻化したものであり、吉田民人（1990）の「加重意味情報量」の概念に近いが、さらに「笑いによって吹き飛ぶ＝無化されるもの」（木村 2001: 12）として（操作的に！）定義されている点が特徴的である。

参考文献

雨宮俊彦, 2001,『相互作用で解く心と社会』関西大学出版部.

Anthony, D., 1999, "Pseudscience and Minority Religions: An Evaluation of the Brainwashing Theories of Jean-Marie Abgrall", *Social Justice Research,* 12(4): 421-456.

麻原彰晃, 1988,『マハーヤーナ・スートラ』オウム出版.

———, 1991,『マハーヤーナ・スートラ part2』オウム出版.

浅見定雄, 1997,『なぜカルト宗教は生まれるのか』日本基督教団出版局.

Blau, P. M., 1964, *Exchange and Power in Social Life,* New York: John Wiley & Sons.（＝1974, 間場寿一・居安正・塩原勉訳『交換と権力――社会過程の弁証法社会学』新曜社.）

Cartwright, D. & F. Harary, 1956, "Structural balance: A Generalization of Heider's Theory", *Psychological Review,* 63: 277-293.
（＝1970, 黒川正流訳「構造的均衡――ハイダー理論の拡張」三隅二不二・佐々木薫訳編『グループ・ダイナミックス II』誠信書房, 845-871.）

Coleman, J., 1990, *Foundations of Social Theory,* Cambridge, Mass: Harvard University Press.

Damasio, A. R., 1994, *Descartes Error: Emotion, Reason, and the Human Brain,* New York: Grosset/Putnam.（＝2000, 田中三彦訳『生存する脳――心と脳と身体の神秘』講談社.）

Elias, N., 1970, *Was ist Soziologie?,* Juventa.（＝1994, 徳安彰訳『社会学とは何か』法政大学出版局.）

Freud, S., 1921, *Massenpsychologie und Ich-Analyse*（＝1970, 小此木啓吾訳「集団心理学と自我の分析」『フロイト著作集 6　自我論・不安本能論』人文書院, 195-253.

———, 1923, Das Ich und das Es.（＝1970, 小此木啓吾訳「自我とエス」『フロイト著作集 6　自我論・不安本能論』人文書院, 263-299.）

藤澤等, 1997,『ソシオン理論のコア』北大路書房.

降幡賢一, 1998a,『オウム法廷　グルのしもべたち（上）』朝日新聞社.

———, 1998b,『オウム法廷　グルのしもべたち（下）』朝日新聞社.

———, 1998c,『オウム法廷 2　グル vs.信徒（上）』朝日新聞社.

———, 1998d,『オウム法廷 2　グル vs.信徒（下）』朝日新聞社.

———, 1998e,『オウム法廷 3　治療省大臣林郁夫』朝日新聞社.

———, 1999,『オウム法廷 4　松本智津夫の意見陳述』朝日新聞社.

———, 2000a,『オウム法廷 5　ウソつきは誰か』朝日新聞社.

———, 2000b,『オウム法廷 6　被告人を死刑に処する』朝日新聞社.

———, 2001,『オウム法廷 7　「女帝」石井久子』朝日新聞社.

———, 2002a,『オウム法廷 8　無差別テロの源流』朝日新聞社.

———, 2002b,『オウム法廷 9　諜報省長官井上嘉浩』朝日新聞社.

———, 2002c,『オウム法廷 10　地下鉄サリンの「実行犯」たち』朝日新聞社.

———, 2003a,『オウム法廷 11　坂本弁護士襲撃犯』朝日新聞社.

———, 2003b,『オウム法廷 12　サリンを作った男たち』朝日新聞社.

———, 2004,『オウム法廷 13　極刑』朝日新聞社.

Hassan, S., 1988, *Combatting Cult and Mind Control,* Park Street Press.（＝1993, 浅見定雄訳

『マインド・コントロールの恐怖』恒友出版.)
早坂武禮, 1998, 『オウムはなぜ暴走したか――内側から見た光と闇の2200日』ぶんか社.
林郁夫, 1998, 『オウムと私』文藝春秋.
Heider, F., 1958, *The Psychology of Interpersonal Relations,* New jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.(=1978, 大橋正夫訳『対人関係の心理学』誠信書房.)
岩上安身, 1995, 「麻原彰晃を信じる人々」『宝島30』3(6): 18-27.
河合隼雄・高橋英利・中沢新一「徹底討議：虚無感からの脱出――精神世界の旅で出逢ったオウム真理教」『imago 総特集 オウム真理教の深層』6(9): 8-25.
Keynes, J. M., 1936, *The General Theory of Employment, Interest and Money,* Macmillan Press.(=1995, 塩野谷祐一訳『普及版 雇用・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社.)
木村洋二, 1983, 『笑いの社会学』世界思想社.
――, 1999, 「ソシオンの一般理論（I)」『関西大学社会学部紀要』30(3): 65-126.
――, 2000, 「ソシオンの一般理論（II)」『関西大学社会学部紀要』31(2, 3): 63-149.
――, 2001, 「ソシオンの一般理論（III）――トリオンからソシオスへ」『関西大学社会学部紀要』32(2): 1-104.
――, 2002, 「ソシオンの一般理論（IV）――愛と欲望のキューブ・モデルとソシオネットの力学系」『関西大学社会学部紀要』33(1): 1-44.
木村洋二・渡邊太, 2001, 「親・子・カルトのトライアッド――信者と家族と教団のソシオン・ネットワーク分析」『関西大学社会学部紀要』32(2): 105-175.
Laing, R. D., 1960, *The Divided Self: An Existential Study in Sanity and Madness,* London: Tavistock.(=1971, 阪本健二・志貴春彦・笠原嘉訳『引き裂かれた自己』みすず書房.)
――, 1967, *The Politics of Experience and the Bird of Paradise,* Tavistock.(=1973, 笠原嘉・塚本嘉壽訳『経験の政治学』みすず書房.)
Levi-Strauss, C., 1968, "Introduction M. Mauss", M. Mauss, *Sociologie et anthropologie,* Pari: Presses Universitaires de France.(=1973, 有地亨・伊東昌司・山口俊夫訳「マルセル・モース論文集への序文」『社会学と人類学』弘文堂, 1-46.)
Lifton, R. J., 1999, *Destroying the World to Save It: Aum Shinrikyo, Apocalyptic Violence, and New Global Terrorism,* Metropolitan Books.(=2000, 渡辺学訳『終末と救済の幻想――オウム真理教とは何か』岩波書店.)
Luhmann, N., 1973, *Vertrauen: Ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexitat,* Ferdinand Enke.(=1990, 大庭健・正村俊之訳『信頼』勁草書房.)
Mead, G. H., 1934, *Mind, Self, and Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist,* The University of Chicago Press.(=1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店.)
Merton, R. K., 1949, *Social Theory and Social Structure,* Free Press.(=1961, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』みすず書房.)
宮台真司, 1995, 『終わりなき時代を生きろ――オウム完全克服マニュアル』筑摩書房.
宮内勝典, 2000, 『善悪の彼岸へ』集英社.
茂木健一郎, 2001, 『心を生みだす脳のシステム――「私」というミステリー』日本放送出版協会.
永沢哲, 1995, 「わが隣人麻原彰晃――霊的実践における技術とポイエーシス」『imago 総

特集　オウム真理教の深層』6(9): 211-243.
中沢新一, 1985, 『雪片曲線論』青土社.
――――, 1995, 「『尊師』のニヒリズム」『imago　総特集　オウム真理教の深層』6(9): 254-277.
西田公昭, 1995, 『マインド・コントロールとは何か』紀伊国屋書店.
大澤真幸, 1996, 『虚構の時代の果て――オウムと世界最終戦争』筑摩書房.
Pascal,B., [1670]1844, *Penses.*（＝1973, 前田陽一・由木康『パンセ』中央公論社.
Reader, I., 2000, *Religious Violence in Contemporary Japan: The case of Aum Shinrikyo* Honolulu: University of Hawai'i Press.
佐木隆三, 2002, 『大義なきテロリスト――オウム法廷の16被告』日本放送出版協会.
櫻井義秀, 1996, 「オウム真理教現象の記述をめぐる一考察――マインド・コントロール言説の批判的検討」『現代社会学研究』9: 74-101.
島田裕巳, 2001, 『オウム――なぜ宗教はテロリズムを生んだのか』トランスビュー.
Simmel, G., 1908, *Soziologie,* Duncker & Humblot.（＝1994, 居安正訳『社会学（上・下）』白水社.）
島薗進, 1997, 『現代宗教の可能性――オウム真理教と暴力』岩波書店.
Shupe, A. & D. G. Bromley, 1994, "The Modern Anti-Cult Movement 1971-1991: Twenty-Year Retrospective", A. Shupe & D. G. Bromley eds., *Anti-Cult Movement in Cross-Cultural Perspective,* Garland Publishing, 3-31.
渡邊太, 2002a, 「ネットワークにおける負の関係の機能」『年報人間科学』23: 193-211
――――, 2002b, 「洗脳、マインド・コントロールの神話」宗教社会学の会編『新世紀の宗教』創元社, 207-245.
Watanabe, F., 2004, "Socion Theory Applied to Religion: An Analysis of Triad Calculation in Social Networks", *Religion and Society, Special Issue, Records of the 2002 Workshops,* 19-31.
Weber, M., 1921, *Gesammelte Aufstze sur Religionssoziologi.*（＝1988, 安藤英治訳「宗教社会学論集 序言」安藤英治他訳『ウェーバー宗教・社会論集』河出書房新社, 69-82.）
安永浩, 1999, 『精神の幾何学』岩波書店.
吉田民人, 1990, 『自己組織性の情報科学――エヴォルーショニストのウィーナー的自然観』新曜社.
吉見俊哉, 1995, 「オウム的なる身体をめぐって」『imago　総特集　オウム真理教の深層』6(9): 119-129.

An Analysis of Affective Logic in Social Networks: Socion Theory and the Triad Calculation

Futoshi WATANABE

This paper presents a theoretical framework to analyze affective logic in social networks. Affective logic generates a sense of ought and drives human behavior. Affective quality of human behavior tends to be omitted from social theory. Social scientists often use the term of rationality to explain human behavior. But the assumption of rationality makes it difficult to understand extreme consequences of history such as terrorism, mass killing, collective suicide, and so forth. I try to replace rationality with affective logic in social theory.

To analyze affective logic, I apply socion theory. Socion theory provides a new framework for interpreting complicated social reality. I examined some concepts of socion theory and developed them to analyze affective logic. Key concepts of socion theory that I apply are "trion" and "sub-space". The concept of trion signifies a device for calculating positive/negative expectations. The concept of sub-space signifies a potential space of subjective reality where trion is embedded in. Sub-space expresses the model of multilayered social networks.

Trion calculation is the basic mechanism of affective logic. The arrangement of positive/negative expectations in social networks forms implicit preconditions of social action. Trion locks together solidly when all three of the relations are positive or when two of the relations are negative and one is positive: PPP, PNN, NPN, NNP. This principle is consistent with F. Heider's balance hypothesis. Trion is a functional device for calculating expectations. If two signs of triad are inputted, then the last sign can be logically calculated. I use the following formula: $P*P \rightarrow P$, $P*N \rightarrow N$, $N*P \rightarrow N$, $N*N \rightarrow P$.

I specified some critical differences between socion theory and ordinary theories of social network analysis. Broadly speaking, socion theory is oriented to describe complicated social phenomenons in which intersubjectivities collapse and communication breaks down, while ordinary theories of social network analysis assume healthy intersubjectivities and peaceful communications. According to socion theory, potential social networks contain reciprocal relations and unilateral relations, peaceful relations and conflictual relations. To use a simple visual figure is the methodological strategy of socion theory to describe complicated arrangements of social networks clearly. The graphic balloon model of trion is useful to disentangle the complicated and plural reality.

I examined the cases of Unification Church activism, Aum terrorism and so forth from the perspective of socion theory. These seemingly irrational activities could be fully explained in terms of affective logic. The balloon model of trion explicates such many cruel social phenomena. Negative incidents are the practical field of socion theory. Then, a clinical sociological task is to explicate the condition of liberation from the locked state of high-voltage trion. Social theories of G. Bataille, J. Krishnamurti and T. Adorno suggest some insights to consider the liberation problem.